

宛先

ニューズレター

低平地研究会 (LORA), 国際低平地研究協会 (IALT)

No. 92

<http://www.ilt.saga-u.ac.jp/lora/index.html>

<http://www.ilt.saga-u.ac.jp/ialt/index.html>

平成30 (2018) 年 6月29日

平成 30 年度 第 1 回 低平地研究会運営委員会の開催

4月20日(金)に佐賀大学理工学部6号館において運営委員会が開催されました。今回の委員会では、定例議題として決算、予算が報告されたほか、役員交代、情報の発信方法の改善、研究会の継続に関する説明、関係機関との連携強化などが議論されました。

低平地研究会の諸活動に関する情報は、本紙や「低平地研究」、ウェブサイトにて発信されています。また、近年低平地の研究分野では国際的な活動が更に活発になってきており、これらの情報も研究会会員へ積極的に発信することが指摘されました。その一つとして、国際低平地研究協会の英文論文誌「Lowland Technology International」に掲載されている論文の概要を低平地研究に掲載することになりました。その一方で、関係機関や民間企業からのニーズ発掘を行い、研究会活動に取り入れることが指摘されました。

研究会継続に関する説明では、平成30年3月末をもって研究会の運営母体であった低平地沿岸海域研究センターが閉鎖したものの、今後も研究会は継続されることが述べられました。低平地に関する研究では、今後も引き続き理工学部都市工学科内、および国内外の関連大学で行われます。そのため、地域との密接な連携が必要であり、研究会を中心とした活動が行われます。

会議の最後には会長交代が行われました。長年研究会会長としてご尽力いただきました緒方会長に代わり、佐賀県建設技術支援機構理事長の西村平氏が就任されました。

大学での組織再編に伴う大きな変化がありました。が、上記の通り、研究会を通して今後も低平地の研究を推進する次第であります。

平成 29 年度 活動報告会 特別講演会の開催

4月20日(金)に平成29年度の活動報告会が佐賀大学で開催されました。今年の特別講演会は、佐賀大学全学教育機構教授の宮武正登先生をお招きし、「中世の佐賀平野における開発主体—集落・



宮武正登先生

館・城—」の題目でご講演いただきました。佐賀平野に存在した有力者の生活拠点を単位として、非排他的な屋敷からなる「散村」から、区画で仕切った屋敷からなる「集村」に変化を遂げたことなど、領主居館の発生と展開と、南里氏による河副荘の干潟開発、龍造寺氏が進めた労働力の結集と経営拠点の再活性化について説明されました。そして、新興領主が主導した開発事業を契機とする村の再編が行われるとともに、南北朝時代から室町時代にかけての政治動乱に乗じて、在地領主が急速に自立していき、「屋敷・館」が増殖・拡張して、最終的には、姉川城などにみられる「城」へ成長した例を説明されました。

その後に行われた活動報告会では、各専門部会から平成29年度のそれぞれの活動内容が報告されました。専門部会報告の冒頭に、三島伸雄運営委員長から引き続き低平地研究会の活動を行っていくことが述べられました。また参加者からは、低平研究会の活動を、会員以外の地域の方にもっと宣伝してほしいとの要望があり、研究会としても積極的に広報活動を行っていくことが確認されました。最後に、平成30年度より会長に就任する西村平新会長(佐賀県建設技術支援機構理事長)より挨拶がありました。

低平地研究に関する豆知識 -その 25-

「クリークの活用法」

佐賀県南部の平野にあるクリーク網は江戸時代から積極的に開発され、総延長が2,000kmに達するといわれています。クリークは平野部における効率的な灌漑と貯水が目的として造られ、農業用途として運用されてきました。また、豊かな生態系の形成において必要不可欠な要素でもあり、例えば佐賀が「トンボ王国」と呼ばれているなどの理由になります。さらに近年では強い雨が発生したときに佐賀市南部のクリークへ雨水を逃がすことで市街地の浸水被害を軽減させるという、防災要素としても運用されるようになりました。

この様にクリーク網は我々に多くの利益をもたらしてはいますが、その一方で「ごいあげ」（現在はごみくいととも呼ばれる）のように廃れた文化もあります。現在、クリークの底には農地から排出された細かな土粒子が底泥として堆積していますが、ごいあげによってその底泥は回収されて農地へ還元されてきました。これは、肥料成分の回収という意味において、極めて重要な作業です。昨今のリン酸肥料の高騰に伴い、下水処理場ではリンの回収が試みられていますがその量は限定的です。そこで、クリーク底泥を回収・再利用ができれば多量のリンを回収できることが期待できます。これはかつてのごいあげ文化を資源回収機能として見直すことにもなりますので、クリークの価値をさらに高められることになるといえます。

（三島悠一郎：佐賀大学理工学部講師）

都市空間専門部会 活動案内

都市空間専門部会等が参画する講演会等が行われます。今回の講演会ではオランダと佐賀の文化比較に関する内容になります。開催情報は下記の通りです。

題目：クリエイティブディスカッション
水辺とまちづくり

会場：オランダハウス（佐賀市呉服元町 8-1）

日時：2018年7月15日（日）13:30 開始

主催：さがクリークネット 共催：オランダハウス（佐賀県）

協力：低平地研究会他

第1部 13:30-15:30

第2部 16:00-17:30、水辺パーティ：18:00-12:00

低平地技術に関する国際シンポジウム

ISLT 2018 開催案内

2018年9月26日～28日の日程でベトナムのハノイにて第11回目となる低平地技術に関する国際シンポジウムが開催されます。6月現在で200編以上の論文概要が投稿されており、多数の参加者が見込まれます。会員の皆様へは開催情報はメールにて随時連絡致しますので、ご参加をお待ちしています。

特別会員

会員
動向

佐賀県県土企画課

佐賀県では、明治維新150年を契機として、今年3月から「肥前さが幕末維新博覧会」を開催しています。この関連イベントとして『すごいぞ！ボクの土木展』を7/25～9/2に、佐賀県立博物館で開催します。

佐賀の土木遺産やわたしたちの暮らしを守り、支えている土木技術等を題材に、佐賀ゆかりのクリエイターによる子どもから大人まで、見て、聴いて、触って楽しめる体験型の企画展です。ご家族やご友人と一緒に、是非、お越しください。



ITI ジャーナル Vol 20、No. 1 の発行

英文機関紙「Lowland Technology International」Vol.20、No.1 が発行され、7編の論文と1編の技術報告が掲載されています。

タイトル	著者
<i>Reconfirmation of Skempton-Bjerrum 2D to 3D settlement conversion using FEM of full scale embankments</i>	S. Chaiyaput and D.T. Bergado
<i>Full-scale Tests of Ground Anchors in Alluvium Soils of Egypt</i>	M. F. Awad-Allah
<i>Effects of pore water chemistry on hydraulic conductivity of saturated loess</i>	F.Y. Zhang and J.X. Zhang
<i>A study for the protection and utilization of the Huzhou new rural tourism landscape resources based on a Rural Residence Image System (RRIS)</i>	Q. Yang and K. Sheng
<i>“Centralized and Popularized” Evolution of the West Lake Space in Northern Song Dynasty and its significance</i>	J. Shen, L. Zhang and Y.D. Zhang
<i>Numerical method for shape optimization of standard floor of the high-rise buildings in hotsummer and cold-winter areas under the low energy consumption target—taking the L-shape as an example</i>	X.Y. Ying, W.Z. Li, Q. Kan, Z. Zhang and G. Ding
<i>Green nursing-home model: The Thammapakon Pho Klang nursing home, Thailand</i>	W. Kulariyasup, J. Horpibulsuk and S. Horpibulsuk
<Technical Note> <i>Georisks in railway systems under climate uncertainties by different types of sleeper/crosstie materials</i>	S. Kaewunruen, L.M. Cortes Lopes and M.P. Papaelias

編集後記

再びニューズレターの編集担当となりました。改めてまして、今後ともよろしくお願いたします。

編集：三島（佐大:sk9822@cc.saga-u.ac.jp）武富、後藤